



一般社団法人 小樽青年会議所

理事長所信

2017年度理事長 杉本 憲昭

一般社団法人 小樽青年会議所

2017年度 基本計画

■ 基本理念 ■

世のため人のため

地域のため

本質を探究し 大胆に行動するJayceeへ

～未来を考え行動する「ひと」が溢れ共に生きるまち小樽に向けて～

■ 基本方針 ■

1. つながりから生み出す会員拡大
2. 組織一丸を生み出す運営と広報戦略
3. 他人事で済ませない相互連携意識の強化
4. 地域から求められる人材へ向けての資質向上
5. 未来を創る若人の創出

■ はじめに

守りつくして破るとも離るとても「本」を忘るな

人と違う自分でありたい。人の意見ではなく自分が決断したい。自分が、自分が・・・自らの道は自ら切り拓き、誰かに干渉されることはない、唯我独尊のように考えていた自分自身。それは強がりなんてかわいいものではなく、ただ無力な自分だと周りに気づかれるのが怖かっただけ。しかし、いつしか挫折や葛藤の先で、多くの人に支えられていることを知った。自分中心に考えていた頭の中が、地域のため、仲間のために何ができるのかを模索し始めた。自分が変わっていった。

JCは変化を促してくれる存在でなくてはならない。自分のためにと立ち上がったスタートラインが、実は世のため人のため地域のために何ができるか、真摯に向き合い行動を起こすスタートラインであるのだ。人を支え、人に支えられる喜びと、国や地域が自らとつながっている実感が、スタートラインの景色に変化を及ぼしてくれる。その景色の変化を呼び起こすことができるのが、JCであると私は固く信じている。だからこそ、JCの変化を呼び起こす力をもっと前進させなければならない。

1949年「新日本の再建は我々青年の仕事である」と立ち上がったスタートラインから生み出された「JC道」とも言うべき、その「道」が示す創始の志を守りつつも、日進月歩の世の中で形骸化してしまった運動や慣習を時に打破し、新たな課題抽出と、解決に向けた事業を構想し、実行することが必要である。守る、変える、創る、そして基本に立ち返る。「守破離」の大切さから学び、不変の志と普遍の価値観の上に、青年らしく大胆な発想で変化を追い求め、自立と共助のまち小樽の実現に向け共にスタートラインからの一歩を踏み出しましょう。

■ つながりから生み出す会員拡大

JCの価値はどこにあるのか。人生最後の寺小屋、まちづくりのできるひとづくり。様々に例えられるJCではあるが、地域と人を結び付け、持続可能な地域づくりのために運動を展開できるのはJCしかありません。自らが地域の課題に向き合い、解決の糸口となる事業の構築を話し合い、実行する。それこそがJCしかない価値の根源なのです。そして、青臭い行動を愚直なまでに繰り返していく姿こそが、JCしかない価値をさらに高めるのです。世のため人のために奉仕する不断の自己研鑽が、友情を育み、自らの心に変化を与えてくれる。その変化はまた地域を変えていく原動力となるはずなのです。

原動力を生み出すのは人であります。ならば地域の未来を考え、行動する人が多く溢れていることが重要なのではないのでしょうか。だからこそ、本年は地域を1ミリでも良い方向に進めるために「前へ」の精神を持った同志を増やしていく、会員拡大が最重要の課題と考えます。誰のためなのか。自分のためだけになっていないか。今一度考えてみましょう。地域のため、会社のため、家族のため、全ての未来にまちづくりとひとづくりは必要なはずです。そこに自ら関わっていくのはJCしかありません。JCの価値を臆せず声に出しましょう。

JCは中立、独立の団体です。だからこそ、共に活動するカウンターパートを自由に選択することができます。逆に考えれば、JCだからこそ人や企業、地域、あらゆる団体同士をつなげることができるのです。その「つながり」を有効に活用し、JCの価値を胸を張って伝えることこそ、新たな同志を集う有効なツールとなり得るはずなのです。「つながり」から「つながり」を創出し、JCの価値を高め、声を上げよう。日々そこにある「つながり」が拡大につながる。会員自らが拡大の意識を高めて、共に未来を考える同志を集っていきましょう。

■ 組織一丸を生み出す組織運営と広報戦略

組織が目的を達成するためには、計画的な組織運営が必要です。情報過多社会の中で、組織を運営していく方法一つとっても多様な情報が溢れており、選択肢は一つではありません。取捨選択をして、信じた方向性を疑わずに運営を推し進めることが何より求められています。そして、必要な事柄を抜け目なく伝える冷静な判断と、統一されたルールのもとで規律を重視する姿勢が大切です。忘れてはならないのが、心の通うコミュニケーションを土台とした運営です。SNSのような情報伝達ツールが広まり、メール一つで多くの人に気持ちを伝えることのできる時代ですが、情熱を伝えるこ

とには不向きです。自らの言葉で、時に相手に直接目の前で伝えることで運動の推進力を高めていく運営を目指しましょう。

また、外部に向けた情報発信は、情報化が進んだ現代では欠かすことができません。情報過多社会の荒波に消えることのないよう、誰に向けて、何を発信するのか、ターゲットを絞り、情報を整理して、効率よく相手の目に触れさせる努力が必要です。そして何より、発信するJCに魅力がなければ、広報は始まりません。常に魅力を探究して、価値を高めていく意識喚起を行い、我々自身を俯瞰的に考察することが重要です。

一人ひとりの力を結集して、全員一丸となり、組織を強くしていきましょう。ここでいう全員一丸とは決して手段ではありません。基本、「本」となるものなのです。皆で行動する。皆に語りかける。全員が運営に携わっている意識を向上させ、組織一丸の言葉を体現する小樽JCの活性化を目指していきましょう。

■ 他人事で済ませない相互連携意識の強化

経済は循環していると言います。一見関係ないように見える商売関係においても、つながっている場合があります。観光客が増えたからと言って関係ないのではなく、そこに配達をする業者やそこに物を卸す業者、売っている物に関わっている業者もいるはずであり、常に円のように経済は循環をしているのです。

同じように、人と人も循環をしています。日本には「和」という国柄がありますが、近年急増している大災害の時には、この「和」とも言うべき人と人のつながりが人を助けるまさに運命共同体とも言うべき力を発揮したのです。JCにとってもこの「和」は重要なキーワードです。JAYCEE同士や先輩諸賢との交流はもちろんのこと、家族や職場、自らが属する別の団体の中で「和」はしっかりと存在をしていますか。この「和」の重要性を率先して皆に説き、行動で皆を呼び寄せるような人材となりえているでしょうか。JCの枠の中だけで成り立つ「和」ではなく、JCの枠を超えた交流を継続していくためにも、自らが一歩前に出た連携の意識を強く持たなければなりません。自分が疲れて休みたい時こそ先に隣を休ませる。その他者の状態を気にかけるアンテナと、心配りを行動で第一に示す姿勢は自らの成長を促してくれます。つながりが自らの成長を促すことであり、世のため人のために自分のためにつながる事なのです。小樽JCが持つ、他者を慮る連携意識をさらに強化し、交流が成長を促す循環を実現し、小樽JCの活性化を目指していきましょう。

■ 地域から求められる人材へ向けての資質向上

誰のためのJCなのか、何のためのJCなのかを考える時に、JCに求められているものは何かを間違わずに捉えなければなりません。JCしかない価値は確かに存在します。しかし、JCの価値観を押し付けても地域や人の変化は望めません。求められているものとJCの価値を近づける努力が我々には必要なのです。時としてJCでは、自分たちの考え方のみで突破を図ろうとする驕った感覚に陥ります。なぜに多くの意見を聞こうとしないのか。意見を聞く機会に飛び込もうとしないのか。多くの人や企業、団体とつながることができるのがJCの良さであるはずなのに、相互の関係性を高めていく努力を怠ってはいないだろうか。

一方通行の話は、一過性の事業しか生み出しません。こちら話を聞いてもらうためには、相手の話を聞き、一から信頼関係を構築して、相互の関係性を高めていく必要があるのです。その土台の上に、相互の話を聞き合える、助け合える関係性が生まれるのです。そして、その関係性が生み出す大きな力が地域を変える大きな力へと変換されることを、我々は小樽運河保存運動から学んでいるはずで、市民の力が行政を動かした。勝利か敗北かは当事者でないものには計ることができませんが、市民の行動がなければ、現在の運河は存在していなかったでしょう。協力して行動するDNAが小樽市民である我々には流れているのです。

誰のためなのか。何のためなのか。地域のためになっているか。会社のためになっているか。家族のためになっているか。今一度自分自身に問いかけましょう。求められている本質を探究し、自らに変化を起こしましょう。地域から会社から家庭から求められ続けるJAYCEEとしての資質向上に努め、地域の先導者として、行動する人が溢れる小樽の未来を創造していきましょう。

■ 未来を創る若人の創出

近年、地域に秘められたストーリーを追体験したり、地元の間しか行かないようなスポットを巡るまち歩きによる観光が一つの手法として確立されています。小樽は港湾物流都市としての発展と、斜陽と呼ばれる衰退を経験して、計らずも過去の遺産を活用した観光へと基幹産業がシフトしました。しかし、その急速な観光産業の発展は、小樽自体の魅力を深く考える時間を奪い、地域の中に残る本当に伝えたい、見てほしい様々な小樽の資源を活用できずにいます。まちを変えるのは「ワカモノ・ヨソモノ・バカモノ」と言われてきました。その中でもまちに責任を持ち、まちの未来を担えるのはやはりワカモノしかいないはずで、我々はワカモノの代表として、まちの未来を担い

挑戦する若人たちにまちづくりのバトンを渡していかなければなりません。若いうちに小樽の魅力をしっかりと学び、必要な経験を積むことで、小樽への愛着を生かした新しい観光産業の在り方を提唱してくれるはずです。そのためには、JCが毎年のように行う青少年への郷土愛育成事業などへの参画は、決して無駄にならない経験になります。小樽を代表する祭りへの参画や、子供たちを対象にした事業を通して得る体験は、自らの地域を見る視点を変えるものとなるでしょう。現在までの我々のまちづくりプロセスを今一度見直し、未来を見据えて種を蒔く団体として、若人の参加目線に立ち、複数年に渡る関係性の構築と、未来を担う若人の継続的な成長を促していくことが必要なのです。未来に責任世代となる若人と一緒になって、地域の魅力について深く考え、観光を通して地域の資源を多角的に活用していき、産業的にも人材的にもリレーができる持続可能な小樽の未来を創造していきましょう。

■ おわりに

前へ

行動しなければ未来は変わらない。

どんなに苦しくても、どんなに辛くても、

踏み出す1歩が自分を変える。

自分が変われば周りも変わる。

周りが変われば、まちが変わる。

だからこそ、その1歩が基「本」となるのだ。

前へ前へ踏み出そう。

あなたの背中を見ている、これから生きる人のために。